

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

妹紅のVRMMO

【作者名】

黒狗

【あらすじ】

ある日、玄関の前に手紙が置かれていた。藤原妹紅はその手紙の主蓬萊山輝夜のもとへ向かった。そこでVRMMOをやることとなった。ゲームに関してまったくの初心者である妹紅、慧音はしぶしぶやることとなった。だがそのゲームはデスゲームとなってしまうた。

プロローグ

「今日の十一時永遠亭に來い。來ないとこの写真をばらまく。輝夜より」

玄関の前にこんな手紙が置かれていた。手紙の中に入っていた写真は慧音が私を押し倒しているように見えるものだった。これってこの前慧音が私の家に来た時にすっかり転んでしまった時のものだと思う。背景が私の家のものだからだ。だが、あいつがどうやってこの写真をとれたんだ。呼び出しは十一時だったな。今十時か、ちょうどいい時間だから向かうとするか。

少女移動中…

十一時ちょっと前に永遠亭についた。私は永遠亭の戸を叩く。中から奴の声が聞こえた。中に入ると引籠りが出てきた。

「今私のことを引きこもりと思ったわね。妹紅。私は姫だから別に何もしなくていいのよ」

「私に何の用だ。輝夜」

「そのことね。妹紅、ゲームやってもらっわよ」

「私はお前みたい毎日やっていないから全然わからないぞ」

「それは大丈夫よ。普段私がやっているような奴じゃないから」

「拒否権はあるか？」

「無論ないわよ。写真はちゃんと予備もとっているから。やってくれるんだったらこの写真は予備」と燃やすわ」

「そうか。ならやってもいい」

「ありがと〜もこたん。初期設定はやっているからいつでもできるわ。でも、十二時から始まるのよこのゲーム。だから一時間ほど待つて頂戴」

「それなら、最初から十二時に呼び出しておけよ。あともこたんと呼

ぶな。お前が言つと虫唾が走る」

「なんとなくよ。大丈夫よ暇つぶしの相手も用意しておいたから。ちょうどいいタイミングで来てくれたわ」

ちよつど戸をたたく音が聞こえた。輝夜がどうぞとその人を永遠亭にいられた。訪ねてきた人は慧音だ。

「永遠亭の姫様が何の用だ。何でここに妹紅がいる。この手紙の中に入っていたものについて話してもらおうか」

「そんないっぺんには無理よ。最初の質問から返していくわ。貴方にもゲームをやってもらいたいのよ。妹紅は貴方と同じようにゲームをやってもらつたために来たわ。貴方にも妹紅の奴にいられたものを入れたわ。ちよつど家に念写ができる天狗が訪ねてきたものだからちよつととってもらつたらこんな写真が撮れたのよ。まあゲームをやることに拒否さえしなければこれは後で本人たちの前で燃やすわ」
「そうか。で、やってもらつゲームとはなんだ」
「これよこれ」

と言って輝夜が取り出したのはヘルメットみたいなものだった。

「これはヘッドギアと言つてこれをかぶつてゲームの世界に入つてもらうのよ。結構大変なのよこれ手に入れるの。妖怪賢者曰く外界ではこれがブームらしいわ。妖怪賢者に頼んでこれを取り寄せてもらつたのよ。少し条件があつたけどね」

妖怪賢者とは八雲紫のことだろう。

「でもなんで私たちなんだ。ほかにもたくさんいただろう」

「それが妖怪賢者の条件のうちの一つよ」

「そういうことか」

「もうそろそろ時間ですよ。姫」

「わかつたわ永琳。じゃあ行きましょつか」

私たちは輝夜について行く。ついた場所には布団が敷かれていた。そこに兎詐欺こと因幡てみると本人曰く薬師の弟子の鈴仙・優曇華院・イナバがいた。二人ともヘッドギアをかぶつて寝ている。

「ここに仰向けになつてこれかぶつてね。十二時ちよつどになったら勝手に始まるから」

言われた通りヘッドセットをかぶって仰向けになった。私の視界は、時計らしき文字が秒数を刻んでいる。これがゼロになったらゲーム開始らしい。秒数は後三十秒ほどだ。一体どんなものだろうか。そう考えているうちに残り時間が尽きた。

第一話

ゲームが始まるのかと思ったら目の前に人が立っていた。

「ようこそ。 ability・worldへ。ここでは使用するスキルの設定、名前入力を行ってもらいます」

そういったあと、目の前にスキルを選んでくださいと出てきた。わけがわからないので戦いに使えそうなものからとっていく。五つ選んだところでそれが消えた。次に名前を入力してくださいと出てきた。別にひねる必要もないので妹紅と入力した。

「それではこの世界を楽しんでください」

そう言われたあと私は集落の中にいた。大きな建物が並んでいて前に慧音から聞いた噴水という水が飛び出ているものもある。ここは集落ではなく町を言ったほうが正しいだろう。辺りを見回している

「妹紅、ここにいたのか。ここはゲームの世界で当たっているんだよね。私たちのかつこうが変わっているのと体がいつもより重たい感じがするしな」

「そうだな。だけどやけにリアルだよ。慧音はスキルとか言う奴な何を選んだんだ？」

「私は、体術、魔力回復、光魔法、水魔法、付加術、というのをとったんだがお前は何をとったんだ？」

「えっと、体術、火魔法、体力回復、調教、状態異常耐性、だな」

慧音の体術はきつと頭突きの為だろうな。

「あゝいたいた。お二人さん。こっちきて」

後ろから声が聞こえてきた。振り向くと四人組がいた。私たちを呼び止めるのは輝夜たちだろう。四人組の頭上には右から鈴仙、永琳、輝夜、てあと表示されていた。

「なんかよつか？輝夜」

「お二人さんにこのゲームの説明をしようと思ってね」

「やる前に話せよ」

「忘れてた。」「こじや話にくいからちよつと別の場所に行くよ」
そう言っただけ私達は場所を移動した。右にある建物の裏で止まっ
た。

「それじゃ説明するわよ」

少女説明中…

「で、分かった」

「ああ」

「さっぱりだ」

「もう説明はしないわよ」

「妹紅には私から説明しておくよ」

「じゃあね。楽しんでおきなさいよ」

「それじゃあな」

「次あったときは勝負しろ」

「それは断るわ」

そういったあと輝夜たちはどこかへ行った。多分レベルというの
を上げに行ったのだろう。

「それじゃ妹紅説明するぞ。この世界は ability・world
というゲームの世界で、こゝではスキルという仕組みがある。スキル
というのは能力の一種でこれにより能力に補正がかかるそうさ。妹
紅は体力回復を持っているだろう。体力回復を持っていない私とは
自然回復する体力の差が出てくるんだ。魔法とかは、スキルで魔法を
取得しないといけない。スキルはレベルという強さを表すものが最
初は5、そのあとは10、20と上がるにつれ取得できるらしい。レ
ベルを上げるにはこの町の外にあるフィールドという狩場で敵、いわ
ゆるモンスターと呼ばれるものを倒すと上がるんだ。説明は以上。
質問は？」

「ありません」

最初からと言っただけなら確実に頭突き決定だしな。とりあえずはレベ
ル上げをしとけばいいのかな。

「じゃあ慧音、レベル上げしに行くか。やることってそれだけだと思うし」

「ちよっとその前に」

慧音は手元で何か操作し始めた。すると私の前にパーティ申請をしますか？というものが現れた。

「それにはいと押ししてくれ」

言われた通りはいを押しした。

「これはパーティ招待というものらしくてな。パーティを組むとパーティ内で倒した敵の経験値を少しもらえるらしい。これで少しは上がりやすくなるはずだ」

「それじゃあ行くか」

「ああそつだな。ここから北に行くとか初心者用のフィールドに出るらしい。さっきの大通りをまっすぐ歩けばつくはずだ」

私と慧音は、フィールドに出た。フィールドにはたくさんの人がいる。流石外界ではやりのゲームだ。こんな中でやる気もないので私たちはそこから少し離れたところで狩ることにした。ちよつど人が少ないところを見つけたのでモンスターを探す。一匹兎みたいなものを見つけた。スローラビットと明記されていて、上に緑色のゲージがある。近づいてみても向こうは攻撃をしてこない、つまりこちらの攻撃が戦闘の合図ということになる。

「慧音、誰から最初にやる？」

「お前からでいいぞ」

「了解。当てたら一回距離とってみるから魔法あててみて」

「わかった」

とりあえず兎を殴る。すると緑色のゲージがほんの少しだけ減った。スローラビットは私たちに気づいたらしく戦闘態勢をとった。ギリギリまで削ってみようかな。私は突進してくる兎を避け思いつき蹴った。今度はさつきよりも減った。これで三分の二くらいにまでなった。結構弱いなもうちよつと強くてもいいかもしれない。今度は突進してくる兎を掴み5m位投げる。

「慧音魔法撃ってみて」

「確か『ウォーター』」

すると慧音の前に魔法陣が現れてそこから強くはないが勢いのある水が出てきた。それが兎に当たりゲージが三分の一になった。私は兎との距離を詰めてとどめを刺す。頭を思いつきり殴ったのでゲージが一気に減りなくなった。兎は光に包まれて消えた。

「お疲れ様。レベルは上がらなかったがこいつをあと二、三匹倒したら上がりそうだな」

「じゃ早く次の奴倒そう」

「そうだな」

私と慧音はしばらくの間兎狩りをしていた。その時にスローラビットの肉などが手に入ったが用途がわからないので売ろうと思う。こつしている間にレベルが四になった。あと一でスキルが取得できるんだったかな。メニューを開いてみると時刻が夕方になっていた。もうそろそろ終わらないとやばいかもな。

「慧音。こっつてどうやって終わる？もうそろそろ終わらないと時間がやばい」

「そうだな。メニューの一番下にログアウトっていうボタンがあるんじゃないか？」

「そんなのないよ」

「本当か！ちょっと待て確認してみる」

慧音はそういつて自分のメニューを操作する。

「本当だ。ログアウトボタンがない。これでは幻想郷に戻れない」

「どうすんだよ。私は大丈夫だが慧音は寺子屋があるんじゃないのか？」

「そうだな多分これに何人かの人が気づき始めていると思うんだ。だからもう少して何かしらの動きが見れるかもしれない。いったん町に戻ろう」

そういつた瞬間、私たちの体が光に包まれた。光から解き放たれたときさっきまでいたところではなく、最初にいた街の風景だった。そして周りにはどんどん人が集まってきた。私たちと同じようにつれてこられたためか周りがざわめいていた。その中には輝夜たちの姿

もあつた。そして上空から声が聞こえた。男性の声のようだが黒いマントに包まれていて顔が見えない。

「ようこそability worldへ。楽しんでいたいと思いますか。みなさんはこのゲームに閉じ込められました。このゲームでの死は現実世界での死につながります。それを心得てください。このゲームを抜け出したいのならだれでもいい、この世界にいるボスを倒せばいいのです。そうすればログアウトボタンが出てくるでしょう。それでは最後までこのゲームをお楽しみください。あと皆さんのアバターを現実世界の姿に置き換えましたよ」

そういつて男？は消えてしまった。要するにこのゲームから出れなくなつてしまったのかな。で、一回死んだらあつちでも死んでると。

「慧音どつするっ」

「ボスを倒しに行くとは決まつてるだろう。早くクリアしなければ幻想郷でも混乱が起きるだろう」

「そうだよな。これからクリアまでよろしくな」

「ああ」

第二話

このゲームから出られなくなって一日が経った。昨日あ後は宿屋を見つけて寝たのだがいつも通り座って寝ようとしたら慧音に頭突きされてしまった。このゲームの仕組みのせいなのか痛くはなかったが説教を受けてしまった。宿屋の一階にある食堂でご飯を食べながら今日の予定を何にするか話した。

「とりあえず今日もレベル上げか」

「まあ、そうだな。だがその前に少し街を回って見ないか？何かいいものが売ってそうだからな」

そんな会話をしていた時に変な男たちが声をかけてきた。

「なあ、その御嬢さんたち俺たちと一緒に外で雑魚狩りしないか？」

「すまないが私たちは一人でやることにしているんだ。だからお引き取り願いたい」

「まあまあいいじゃねえか。俺たちと一緒にのほろがレベル上げやうだろっ？」

「それでも断る」

「つれないなあ。一日でいいから一緒にやろっぜ」

ナンパの類だろうから慧音が断っている。結構しつこいので私は席を立って慧音の手を引っ張って外に出るそのまま近くにある小道に入って男たちをまく。

「おい、妹紅何で逃げたんだ」

「ああいうやつらって昔からしつこいからだ。あのまま断っていても時間の無駄だろう」

「それもそうだがこれはやりすぎじゃないのか」

「それは大丈夫だろうな、ああいうやつって懲りずにほかの人とかにもナンパしに行くだろうっしょ」

「はあ、そうか。じゃあこのまま町を散策しようか」

私たちは大通りに出てとりあえず目に入った店に入る。鎧や剣などが置かれていることからここが武器屋だと思われる。カウンター

からNPCと思われる男の店員が声をかけてきた。

「いらっしやい、二二では武器を扱っているぜ」

そういったあと私の目の前にパネルが現れた。私はその中から現在の所持金で買えるもので革のグローブと革の肘あてを買った。サイズが自動で調整されているのか、私の手にちょうどいい大きさになった。慧音はローブと木の杖を買っていた。取得していたスキルから考えると魔法使いとかに向きそうだったしな。

「店員さん、ここらへんに薬とかを売っているところはないか？」

「それならこの店を出て向かいだ」

「そうか。ありがとう」

「どういたしまして」

「次は道具屋だな。行くぞ妹紅」

なんか慧音が張り切っているな。何かいいことでもあったのだろうか。

「いらっしやいませ」

そういったあと、商品のパネルが出てきたので初心者HPポーションを三つほど買った。どっちも戦いなれているし私は体力回復を持ってるから回復は早いはずだし。

「妹紅、雑魚狩りに行くか」

慧音も買い物が終わったようで、準備万端なようだ。私は返事を返し、店を出た。

外は昨日よりも人が減っていた。ここでのゲームオーバーは死に直結するから、死にたくない人は最低限外に出ないようにするだろうし。今日は昨日のところよりも奥で狩ることにする。スローラビットばかり出てきたから別のモンスターが出てくるといいな。移動中にスローラビットを三体ほど見つけたので体を温めるために倒した。見たことがないモンスターが出てきたのでそこで雑魚狩りを始めることにした。モンスターは人型で、緑色をしていて、棍棒を持っていた。こいつは攻撃的なのか私が近づくと攻撃を仕掛けてきた。だが、攻撃速度は思ったよりも遅かったので簡単に避けられた。仕返しに回し蹴りを頭にあて、蹴りを当てたところとは正反対の位置に掌底

を当て、距離をとる。モンスターの体力ゲージが一気に半分近く減り黄色になった。

「妹紅大丈夫か？」

「平気だよ。それより慧音付加術使って。一気に終わらせるから」

「そうか、『攻撃上昇』」

そういつたあと私に淡い赤い光がまとわりつく。これが付加術の効果で一定時間攻撃力が上がる。私はモンスターとの距離をつめ、後ろに回り込み背中を思いっきり蹴とばす、後ろからの攻撃にモンスターは前によるめく。追撃として火魔法をあてる。

「フアアア
火」

モンスターは後ろからの追撃に倒れたが体力はほんの少し残っていたので、私は足で棍棒を抑え込み頭に思いつきり正拳突きでとどめを刺した。これと同時にレベルアップの効果音が頭に鳴り響く。これでレベルは5になり新たなスキルを覚えることができる。私はメニューでスキル所得を選び、新たなスキルとして警戒を入れた。説明によると突然の不意打ちに対し事前に気づくことができるということだ。

「慧音はレベル上がった？私は警戒ってスキルをとった」

「ああ、上がったぞ。私は雷魔法というのを取得した。妹紅あその木陰でモンスターが出るまで休憩しよう。昼ごはんも持ってきたから食べよう」

「そうだね。ちょうど十二時をきった頃だし」

ゲームの世界で食事つてのも少し変だけどな。慧音が持ってきた昼ごはんはサンドイッチだった。幻想郷ではパンというものがあまり出回ってない。慧音も数えたぐらいしか食べたことないだろうから珍しくて昼ごはんにこれを買ってきたのかな。

「いつして昼ごはん一緒に食べるのも久しぶりだな。普段は忙しいからそんな時間もなかったのに」

「それもそうだな。たまにはこんなものいいな」

サンドイッチを食べ終わり食後のお茶を飲んでみると、遠くのほうでプレイヤーを見つけた。青い髪を二つに結った女の子だ。女の子

は私たちを見つけると走ってきた。

「君たち幻想郷の人だよな。私は河城にとり。妖怪の山の河童よ」

「私は上白沢慧音。人里で守護と寺子屋の教師をやっている」

「私は藤原妹紅だ」

「にとりだっけ。なぜ私たちを幻想郷の人だと思ったんだ？」

「昔文文。新聞で見たことある人だし、その髪の色だと普通の人には滅多にいないからね」

「それもそうだな。で、にとりとやら私たちに何の用だ？」

「特に用はないよ。あの街たまに知らない人たちから声かけられるから」

「盟友って私たちのことか？」

「そうだよ。河童にとって人間は盟友これ常識」

「河童の常識を押し付けられても困るな」

「私はもう行くね。装備品とかつくってるから欲しいものがあつたら連絡してね」

「そうか、じゃあな。何かあつたら連絡するさ」

「気を付けて帰れよ」

にとりは街のある方向に駆け出して行った。私の知っている限りでは河童は人見知りなはずなのにな。

「私たちが輝夜以外にも幻想郷の人が来ていたんだな」

「河童のことだから自分たちで同じのを作っただんじやないか。輝夜が初期設定は終わらせたって言ってたけど鈴仙とてゐがやっているあたり妖怪用に設定をとりにでもやってもらったんだろっ」

「それもそうだな。休憩はもう終わりにして雑魚かろっな？」

「ああ、分かった。今度は私がやるから援護をよろしくな」

妹紅のステータス

LV 5

HP 70 / 70

MP 15 / 15

ATK	25
DEF	16
MAT	13
MDE	7
SPD	14
LUK	3
所有スキル	
体術	Lv 3 , 体力回復
教	Lv 1 , 警戒
	Lv 1 , 状態異常耐性
	Lv 1
	Lv 1 , 調
	Lv 3 , 火魔法
	Lv 3 , 雷魔法
	Lv 2 , 付加術
	Lv 2 , 魔力回復
	Lv 2 , 水魔法
	Lv 1 , 光

慧音のステータス

LUK	5
SPD	10
MDE	17
MAT	20
DEF	22
ATK	18
MP	24 / 24
HP	63 / 63
Lv	5
所有スキル	
体術	Lv 2 , 魔力回復
魔法	Lv 2 , 雷魔法
	Lv 1
	Lv 2 , 光
	Lv 3 , 水魔法
	Lv 2 , 付加術
	Lv 2 , 魔力回復

第二話

慧音の戦い方は遠距離攻撃を中心とした攻めだ。幻想郷じゃあ普通の戦い方だから特に問題はない

。援護と言ってもやることがないので私は見ることだけだ。運よく生き残って慧音の近くまで来た雑魚は頭突きで倒されるし。私より効率のいい戦い方をするから慧音の戦闘はすぐ終わる。

「妹紅。そろそろ日が暮れるから切り上げよう」

メニュー画面で時計を見ると五時半を回っていた。日が暮れると視界があまり良くないしモンスターも変わる。松明などのアイテムがないと夜の戦闘は厳しい。

「それもそうだね。ここらへんには明日もくるか」

「たーすけーてくださいーい!!」

「慧音今、何か言った？」

「私は何も言ってないぞ。助けを呼んでいた感じに聞こえたのだが」

「そこの方たち。たすけてくださいー!」

後ろを向くと大体50mくらいだろうか、そこから誰かが走っている。後ろにはモンスターらしきものも見える。

「とにかくたすけるぞ妹紅」

「ああー!」

私と慧音は魔法の届く範囲内に移動する。モンスターは七体くらいだな。とりあえずモンスターの注意をこっちに引き付けるために魔法を当てる。今ので三体か。まだ距離があるからこの三体は慧音に任せるとして私は残りの四体を倒すことにする。

「慧音そっちは頼む。私はあつちを片付ける」

「わかった。無茶するなよ」

私は逃げている人のところに走る。ついでに魔法を何発かあてる。三匹当たったが、あと一匹が追跡を続けている。

「おーい、一匹なら対処できるか？」

「それなら何とかできそうです」

一対一なら何とかかなりそうだな。私も始めましようか。とりあえずは魔法をできる限り打ち込む。できるだけ一体だけではなく全体にあてるようにして全体的にダメージを与えるようにする。そして三匹の中で一番近い敵に接近、飛び蹴りを食らわす。後ろに倒れたが、HPはレッドゾーンに突入しただけで倒れてはいなかった。とどめとして頭を思いっきり踏みつける。一匹撃破つと。次は二体同時に相手してみるか。ちょうどいいことにまとまっているし。さっきの奴と同じように飛び蹴りをするけど位置を調整して二体が並ぶようにしてける。二匹ともくらったみたいでさっきよりHPが低かった一匹を撃破した。あと一匹のほうは黄色か。魔法を当てて倒れているモンスターの腹を思いっきり殴った。これでHPは0だな。

「妹紅、終わったか」

「ちょうどいま終わったよ。あの子は？」

「あっちも終わっているぞ。取り合えず向かうか」

私たちは女の子のところに向かった。女の子は白髪で、小柄な女の子だ。

「ありがとうございます。友達を探していたらトラップに引っかかりたみたいで逃げていたら貴方たちにあっただんです」

「そういうことだったんだ。捜している友達って誰？私たちが知っているかもしれないし」

「にとりって青い髪の女の子なんですけど、見たことある人がいるって言って走り出しちゃって探してたんですよ」

「にとりなら町に戻ってるよ。見たことあるって人は私たちのことだしな。貴女はにとりの友達ってことは幻想郷の住人？」

「はい、私は犬走椀といいます。妖怪の山の白狼天狗です。にとりとは将棋仲間で八雲紫からもらったゲームの複製を作ってみたからってことでそのテストの為にやったんですけどこんなことになるなんて思いませんでしたよ」

「そうりゃそうだよな。私は藤原妹紅。迷いの竹林に住んでいる焼き鳥屋だ」

「私は上白沢慧音だ。人里で寺子屋を開いている。あとは歩きながら話そう。そうじゃないと暗くなる前に町に戻れなくなってしまっ」

そういって。私たちは

「そうなんですか。幻想郷から参加者って結構いますね。紅魔館の人たちもやっているって聞きましたし」

「そうなのか。他にはだれがやっているか聞いたか？」

「聞こえたのがそれくらいでほかのは聞き取れませんでした。でも、私たち妖怪の山からは私にとり、鴉天狗のはたてさんに守屋神社の人たちだったはずですよ」

「幻想郷も暇人がたくさんいるなあ。鴉天狗と言ったらあの文屋はどうしたんだ？」

「あいつですか。私にとりに頼んでこさせないようにさせてもらいました。あの人がいたら私の調子が狂いますからね」

「そうか。嫌われ者だなあの文屋も。町に入ったらにとりにも連絡を取るか？」

「あーその手もありましたね。忘れていました。いつも能力に頼って探したりするものでそういうのを忘れてしまっんですよね」

「椀はどういう能力なんだ？」

「私は『千里を見通す程度の能力』です。妖怪の山の見張りにとって便利な能力なんです」

「それだと視界に頼る癖もつくな。門も見えてきたし急ごうか」

「そうですね。今日は助けていただきありがとうございます。あとフレンド登録をしてもいいですか？いつでも連絡取れますし」

「いいよ」

とといったあと椀はメニュー画面を弄ったあと私の前に画面が現れ、フレンド登録をしますか？と出てきた。これに了承した。

「それでは私はここで。また会いましょう」

「じゃあな。トラップに引っかかるなよ」

「元気でな。にとりにもよろしくと伝えておいてくれ」

そういったあと椀は走って門を抜けて行った。

「あんなにあせらなくてもいいのにな」

「そうだな。でも私たちも急がないと宿とか取れなくなるぞ？」

「あそこっていつも人少なそうだから問題ないって。そうだ、明日にでもにとりのところに行くか？」

「別にかまわないぞ。このゲームについての情報とか何かしら知ってそうだしな」

第四話

にとりと椀にあって翌日。私達はいつも通り宿屋の一階にある食堂で朝食をとっていた。メニューはスクランブルエッグにベーコン、トーストだった。和食が恋しいな。

「慧音、今日はにとりのところに行くんだっけ？」

「ああ、今椀に連絡している。にとりは今寝ているそうだから午後一時ごろに中央にある噴水に来てくれだよ」

今は午前八時だから三時間か。狩りに行っても近隣にしか行けないから経験値稼ぎの足しにもならないか。となるとこの町を回るくらいかな。

「じゃあ時間になるまでこの町を歩き回るか。ここって結構広いし道具屋しか行ってないから他にどんなものがあるかも知らないし」

「妹紅がそうしたいなら私は構わないよ。特にやることも決めていないしな」

「そういえば慧音。もうそろそろ満月の日はずだけど歴史の編纂とか大丈夫なのか？あとこのゲームやるときにかぶったヘルメットって角を出すところがなかったはずだし」

「それは問題ない。あらかじめ私用にそういう調整が施されていたしな。歴史の編纂はここでもやる。紙とペンとがアイテムとして売っているからそれにまとめるつもりだ」

「それはよかった。月一しかできないのにたまってしまうとさらに大変なことになるし」

「私もここですることができることはありがたいと思ったよ」

満月の前後の日はレベル上げは休んだほうがいいか。幻想郷で満月が昇り沈むまでが編纂の時間だから慧音が睡眠がとれなくなってしまうし。幻想郷でも大体こんな感じだったっけな。結構前に満月の日に慧音の家に行ったら頭突きくらって追い出されたんだっけ。

「ねえその嬢ちゃんたち俺たちと遊ばないか？いいところたくさん知っているよ」

またナンパか。しかもこの前もしてきためんどくさい奴らだ。一発殴ってやるうかと思っただがここで問題を起すのもめんどいからやめることにした。若い奴らってなんでこう気安く声をかけてくるのだろうか。外の人の考えはわからないものだ。もちろん断るがな。返答しようと思っただら慧音が断ってくれていた。

「私たちはこれから待ち合わせがあるのでお断りします」

「そんなじゃその待ち合わせしている人と一緒にもいいから遊ぼうぜ。俺たちには特に問題ないし」

「それでもお断りします」

「ほんのちょっとの間だけでもいいからさ、俺たちと付き合ってくれよ」

「無理なものは無理です。これ以上私たちとかかわっても何も変わりませんよ」

相変わらずしつこい奴らだ。これ以上いうのだったら決闘というシステムを使ってでもしてこいつらをぶん殴るか。確か決闘のシステムは両者の了解のもとにプレイヤー同士の戦いができるシステムで、このシステムで戦う場合は死亡扱いにならないから安全だし。

「ほんのちょっとでいいから一時間！いや、三十分でもいいから」

「なあ、お兄さん。ちょっと賭けをやらないか？私に勝てたら友人との待ち合わせまでの間遊んでやるよ。もしあんたが負けたら私たちにつかかるなよ。勝負方法は決闘システムを使う。ただ、私一人で戦うがそちらは何人でかかってきても構わない」

「そんな条件出していいのか嬢ちゃん。俺たち相手に一人ってことはどんな目にあっても知らないぜ？」

「私はこれでも腕に自信があるんでね。別に問題ないさ。早く始めようじゃないか」

「!?いいのか妹紅？そんな約束をして」

「問題ないさ。それに私が勝ったらこいつらに絡まれることもないしこいつらを殴れる。それに万が一負けたとしてもこれ一回に付き合うだけでこいつらとの縁もきれるだろう」

「…はあ。絶対に勝つんだぞ」

「もちろん」

普通の人間相手ならたとえゲームの中でも私が負けることはないはずだ。私はメニューを弄り決闘の申し込みを出す。話しかけてきた男はそれに同意し、パーティメンバーも決闘に参加できるように設定した。そして私たちは決闘場というところに転移された。

第五話

決闘場は広く、直径で100mくらいあり、観戦席が私たちを囲んでいた。観戦客もなぜかちらほらいた。敵の数は五人、二人は盾持ちで、片方は小型の確かバツクラーと片手剣、もう一人大きい盾で、槍を持っている。一番大柄な男は両手もちの大剣で、私の提案に乗った男は片手剣で盾はない。残る一人は杖持っているので補助役兼攻撃役なのだろう。剣持ちが多いのは運が良かったかもしれない。

「じゃあ、始めようか。お兄さんたち」

「このコインが落ちた瞬間が開始の合図だ」

そういつてリーダー格であるうしつこい男がコインをなげる。コインは私の胸元を通り過ぎ地面につくつかつかないかので大男が切りつけてきた。これってフライングじゃないのかな？まあいいか私は後ろに跳びファイアで牽制する。

「甘いな、嬢ちゃん」

横からナンパ男が突きの構えで攻撃してきた。やっぱり大男の先制はこのためだったか。

「んなの最初の攻撃から読めてたよ」

私は体をひねってそれを回避し、裏拳を背中にくらわす。そして、倒れた男の頭を思いつき踏みつける。運が良かったのかこの一撃でナンパ男が気絶した。確か状態異常がかなり現実味を帯びていて、特定の場所へのダメージにより気絶判定が発生するし、その確率も高い。気絶した場合五分間行動不能になる。こつという場合気絶したら戦線離脱と一緒に使い物にならない。

『サンダー』

『ファイアウォール』

とつさにこの前覚えた魔法を放つ。名の通り炎の壁が現れたが、少し遅かったらしくダメージを受けてしまった。やっぱり魔法を使うやつって厄介だな。とりあえず気絶した男を大男に向かって投げ、私はそれと同時に大男に向かって走り出す。大男はそれを持っていた

剣で叩き落とす。投げたのもなんだがひどい扱いだな。大男が振り下ろした剣を足場にして私は大男の顎に蹴りを食らわし、杖もちのほうに魔法を当てる。だが、盾持ちの一人がそれを防ぐそして横から杖もちが飛び出し、今度は水属性の魔法を使ってきた。私は大男を盾にして魔法を防ぐ。飛ぶ方向さえわかればよけるのは弾幕ごっこよりも簡単だな。

「隙あり!!」

後ろからそういう声がした。振り向くと杖もちの前で攻撃を防いでいた盾持ちとは違うほうの奴が剣を振りかぶってきた。ちっ、忘れられていた盾持ちの片割れか！さすがに不意打ちを回避できるわけではないので剣の腹を殴り軌道をそらし相手の内側に入る。そして、そいつの鳩尾を思いつき殴りひるんだ隙に剣を奪い相手ののど元に突き刺し、剣を気絶している男に思いつきり投げる。少し攻撃がすすっていたみたいでHPが減っていた。

「っおおおおー!!!」

そう、雄たけびをあげて大男が剣を横なぎにしてきた。それを後ろに行くことで回避し大男の顔面にファイアを当て接近し腹を蹴る。私は攻撃の手を休めることなく急所などを攻撃する。魔法などの奇襲対策のために常に杖もちと盾持ちの行動を確認できるように位置で攻撃する。急所に何度か当て、ついに大男が気絶した。ステータスによって気絶判定が変わるのかな？これであと一人か。とりあえず気絶している大男から剣を拾い上げそいつの頭にさし、とどめを刺しておく。杖もちのほうを確認してみるとちょうど魔法を放とうとしていた。

『サンダーボルト』

『ファイア』

私は思いつきり横に跳んで魔法を放つ。サンダーボルトは早かったが攻撃範囲が狭くて足にかすったくらいで済んだ。弾幕ごっこだったらもつちよっとうまくよけて返せたんだけどな。

『サンダー』

「ああもつウザったい!!」

杖もちは多分MPが切れるまで打つつもりだ。これで減らしきれたら勝てるし反撃しなかったら絶対に負けるし。

『ウォーター』

『ファイア』

私はよけながら二人との距離を縮めてゆく。自機狙いの直線状の弾幕ならよけるのは簡単すぎる。輝夜から送られてくる刺客などよりも遙かに緩い。ああ、早く戻れたらいいな。二人で満月の夜に殺し・合・い・をするいつもの日々だ。

「早く負ける!! 『ウォーター』」

「残念ながらそんな速さなら簡単によけられるよ」

あと5mで二人のところにつく。私は、ちょうど二人の目の前にファイアウォールを出す。これでMPがほとんどなくなってしまう。まあ問題ないけど。盾持ちが何のためかわからないが槍を壁の前に突き刺した。多分私が来そうな位置を予想してついたのだろうが、見事に空ぶってしまっていた。あと一秒もしないうちに消えるのに。空ぶった槍の方向とは反対の方向で私は消えるのを待ち、消えた瞬間前に飛び出し、杖もちのほうに蹴りを入れる。さすがに盾持ちは反応できるわけはなく杖もちに当たった。そして、杖もちの杖を持っている手をつかみ後ろに回す。そのまま杖を奪い、遠くへ投げ捨てる。首に手刀を食らわし、盾持ちのほうに蹴り飛ばすと同時に盾持ちの後ろに回り込む。盾持ちは反射で、盾を前に出すがそれは無意味な行為で後ろに回った私にまで注意が向かなかった。背中に回し蹴りを頭にくらわし、地次に背中らにひじ打ち、盾を蹴りできた隙間から腹に膝蹴りをする。運よくこれで気絶になり、全員が戦闘不能状態になった。ふう、久しぶりに対人戦をやると結構疲れるわ。勝負が終わったことにより、私の目の前にYOU WINの文字が表示された。